

## 人はどんな時に歌を口ずさみたくなるのか

経営学部教授

河合正男



年末のテレビ番組だったかに、「あなたはどんな時に歌を口ずさみたくなりますか」との質問があった。私はあまり歌はうたわないが、私に鼻歌でも出るとすれば、何かがうまく行って嬉しい時に決まっている。あなた（読者）はどうだろうか。

そんなことを考えながら、アイスランドの本について書いてみたい。ノーベル文学賞作家についてである。アイスランドは人口30万程の国であるが、ノーベル文学賞作家がいる。また、美人国であり、ミス・ユニバースが2人もいる。

私は駐ノルウェー大使としてアイスランドも兼任していた。アイスランド人は謙虚で、おだやかで、また思索に富んだ人たちである。それは、冬には長い夜を過ごさなければならないということと関係しているのかも知れない。

アイスランド人は殊に読書好きである。クリスマスの前に本屋に行ってみると、本がうず高く積み上げられている。クリスマスプレゼントで一番多いのが本である。そのアイスランド人が誇りとしているのが、1955年にノーベル文学賞を受賞したハトルトール・ラクスネス (Halldór Laxness) である。代表作『独立の民』は、一人の貧しい小作人が悲惨な生活を続けながら懸命に働くという物語である。物語の中心は最後に行き着く成功と繁栄ではない。そこに行くまでの生活の苦しさと、その中で他人に頼らず独り立ちしようとする不屈の精神が主題である。私が電気のようなショックを受け

たのは次の場面である。

主人公のビヤトールは、身重の妻を一人残し、羊たちを追って長い放牧の旅に出る。早く借金を返して自分の家を建てるため、少しでも羊たちを太らせて帰らなければならない。夏が過ぎ、秋も終わり、冬が始まるまで、一人で放牧にしがみつき、雪が降る中をやっと我が家に辿り着いた。我が家には、人声は無く、犬が窓を引っかきながら吠えているだけだった。家の中は真っ暗だ。やつとのことで火をつけてみると床の上で妻が血に染まって死んでいた。ベッドの上では、女の子の赤ちゃんが毛布にくるまれて、かすかにすすり泣いていた。妻は一人で出産しやつとのことで赤ちゃんを守り、息絶えて行っていたのだ。

彼は何も考えられないままに、隣家に挨拶に行つた。<sup>しゃいか</sup>そこで、「どうでしたか」と問われた彼は、ただ詩歌をうたい出した。

か  
彼の羊の群れの恐ろしや  
わずかの光も彼は知らず  
凍てつく原野の嘲笑い  
立てし人は倒れしまま (河合仮訳)

これを聞いて隣家の人は彼の奥さんに何か重大なことが起きたのだと悟った。

この本では、重大な局面になるとよく詩歌が飛び出してくる。もはや散文では表現しがたい状況なのである。この小説は北欧の人たちが厳しい

自然の中で築き上げて行った重い生活の物語である。このように読んで来ると、日本文学では「古事記」に似ているところがあるのではないかと思いついた。「古事記」は文学としても優れたものだと思う。ここでも重大なことが起こる度に詩歌が出てくる。代表的な例が次の場面である。

倭建命が東征の途次、今の焼津で野火による火攻めを受けながら、これを脱出し、さらに東に走水海を渡ろうとしたが、荒波が出て渡れなかつた。そこで、この東征に従っていた妻の弟橘比売命が、自ら犠牲になろうと海に渡り行つて波を静めた。自らの命を捧げようとする間際に次の歌を歌われた。

さねさし相模の小野に燃ゆる火の  
火中に立ちて問ひし君は  
(あの相模の國の人里離れた野原で、火に囲まれ、  
ぼうぼうと燃える炎の中でわたしの名を呼んで下  
さったあなたですもの  
………… 梅原猛 現代語訳)



## ことし2010年は「国民読書年」です。

2008年6月に衆参両院議会にて「国民読書年に関する決議」を全会一致で採択。この国民読書年推進会議には、鈴木恒夫、活字文化議員連盟幹事長（2009年度より白鷗大学客員教授）もメンバーとして入られています。

政官民協力のもとで国を挙げて読書運動に努力するというものです。

### 白鷗大学総合図書館から

この「国民読書年」のキャッチフレーズは「じゃあ、読もう」です。  
では、図書館からは「まず、図書館に来てみませんか。本を借りてみませんか。」

雑誌「大学時報」日本私立大学連盟発行  
<本館1階雑誌架>  
2010年1月号（No.330）の特集は  
読書と大学生…大学は教養人をつくる です。



読書は、人間の文化の基。

言語や文字による文脈を読むことで、文章を作る能力、コミュニケーション能力、また情操的な感情的能力が生まれるといいます。活字離れ・読書をしない、できなくなる危惧のなか、能動的に文字を使う習慣をつけませんか。

図書館には、22万冊の蔵書があります。和・洋雑誌があります。各大学の研究紀要があります。そして環境の良い閲覧スペースがあります。この国民運動としての読書年を図書館で過ごしませんか。



## 英語で日本文化を読み解く—自文化再発見のために

David Matsumoto 著 The New Japan: Debunking Seven Cultural Stereotypes (2002) Intercultural Press, Inc.

教育学部教授

宮 里 恭 子



グローバリゼーションの時代を生きている私たちは、多様な価値観が渦巻く多文化社会で、自分のアイデンティティーを守りつつ、異文化による摩擦を回避し適切に対応していくことが求められている。しかしこのことは、何も文化背景が異なる人々との付き合いに限定されることではなく、同じ言葉を共有し同じ国に生まれた人々の間でも、世代、性別、地域、環境、性格等の差異により、様々な衝突や戸惑いを生み出している。異なる価値観を持つ人々とうまく付き合うには、一体どうしたらよいのであろうか。

解決への第一歩として、まずは自分自身の価値観や文化を認識する必要があるのは言うまでもない。しかし、自文化というものは無意識のうちに私たちの生活や精神に組み込まれており、改めて認識することは難しい。海外に出てまず最初に気づくことは、自分は日本人なのに日本について何も知らないということである。海外では、日本がSONYやTOYOTAに代表される科学技術国であることはよく知られているが、日本文化についてはよほど日本通でもない限りほとんど知識がない。そこで日本からやってきたというと日本のことについて色々と質問されるわけである。そんな時、日本人の考え方やちょっとした言動のなぞについて問われても、「習慣だから。伝統だから。」で済ませてしまい、結局、「なぜそうするか」までは考えたことがないと気付かされる。「異文化理解」の授業でも、「どうして日本人の高校生は1歳程の年の差で先輩に敬語を使うのか。」との問い合わせに対し、「日本の習慣だから。」「それが礼儀だから。」という答えがほとんどである。つまり、客観的に自文化を分析することが欠けており、この認識不足が文化的な背景や考え方の異なる他者への偏見や誤解を生む原因の一つとなるのである。

そこで、「日本人とは？日本文化とは？」を

改めて考えてみるために、David Matsumoto著『The New Japan』を紹介したい。日系人として日米両文化に精通し、心理学者としてSan Francisco State Universityの教授を務める著者は、日本人の価値観がどのように変貌を遂げたのか、古き良き日本の伝統文化と比較しながら現在の日本文化を詳述している。具体的には代表的な7つの側面—集団主義、自意識、世間、感情表現、サラリーマン人生、終身雇用、結婚観—に絞り、統計や調査結果を基に分析し、どんな未来を目指すべきか見解を示している。

日本人の伝統的精神や美德については、Lafcadio Hearn (ラフカディオ・ハーン) の“Glimpses of Unfamiliar Japan” (1894) を始め、新渡戸稻造の『武士道』 “Bushido: The Soul of Japan” (1969)、Ruth Benedict (ルース・ベネディクト) の『菊と刀』 “The Chrysanthemum and the Sword” (1946) などを紹介している。ハーンは、日本人を “a humble, persevering people, who, in the face of danger, threat, grief and other disheartening emotions, managed to maintain a sense of dignity about themselves and smile” と言っている。つまり、控えめで辛抱強く、たとえ、危険や脅威、悲しみやその他の心を痛めるような感情の時にも、自身の威厳と微笑を維持できる人々としている。また、新渡戸については、武士道を、rectitude (道徳上の正しさ) or justice, courage, benevolence (慈悲、情け), politeness, veracity (眞実、正直), sincerity, honor (名譽), loyalty, and self-control などからなっていると説明し、義理と恩が武士道の基礎であると言っている。第二次大戦中、日本についての情報収集を任務として来日したベネディクトは、日本人の価値観について、義理や恩はもちろんのこと、chuugi (loyalty), self-discipline (自己鍛錬), virtue (徳、善), honor,

righteousness（高潔）などを挙げて、日常生活での道徳や倫理の構造について言及している。更に、日本文化は恥の文化(shame culture)であるとし、集団からの孤立や制裁を恐れ、集団における他者との結びつきからアイデンティティーを形成していると説明した。このように、日本人として、最低限知っておくべき自文化知識の復習が簡潔に記されている上、英語で読む日本文化は、それだけで、ある距離感が生まれ、自文化を客観的に捉えることができる。それでは、これらの伝統的日本文化は、どのような変貌を遂げたのだろうか。

戦後の日本人社会については、中根千枝の“Japanese Society”(1970) や『タテ社会の人間関係』(1967)などを紹介しながら、筆者は7つの日本文化の典型的側面を紹介している。まず、一つ目の側面である集団主義 collectivismについてであるが、最近の日米大学生対象の集団主義・個人主義的傾向に関する研究では、両者に大差はないとの断じている。ジェネレーションギャップと捉えられないこともないが、筆者は少なくとも若い世代においては、集団主義を守る人とそれに異を唱える二つのグループがあり、確実に集団主義から個人主義へとシフトしていると述べている。また、他者依存と自立という概念における個の確立や、それに付随して起きる他者との関係も、日米の大学生の間に大きな差はないとしている。本来、他者依存のなかで個の確立がなされる日本人にとっては、他者と自己との境界線はあいまいで、人と違うことや独特であることは重要視されない。また、社会での役割を通して自分を認識し、他人のために何かをすることがよいとされるので、重要な意思決定の場面では、個人の好みやニーズよりも集団のニーズや目標などを優先するとされているが、これが崩れつつあるということである。つまり、他者と自分との明確な違いからアイデンティティーを形成し、自分の人生で何か達成することを優先する個人主義の考え方へ変わってきていると指摘している。更に、日本人の感情表現についても、以前は否定的な感情（悲しみや怒りなど）を含めて感情を表に出さず、建前対本音のような概念が存在していると言わってきたが、

近年、特に若い世代の日本人は感情表現が豊富であり、特に同じグループに属する仲間内では、かなり感情を露わにすると報告している。同時に、会社に尽くすサラリーマン像が変化し、家族や自分の人生に重きを置く人生観にシフトしていることや、日本社会の屋台骨であった終身雇用制が崩壊し、男は外、女は内という日本人の結婚観にも変化が現れ、結果として非婚・離婚率の増加が見られるなど、社会構造に急激な変化をもたらしている事が紹介されている

Matsumotoは、これらの変化は、日本古来の集団主義がアメリカ化により個人主義に変わりつつあることが最大の原因だとしているが、この個人主義を日本の核である集団主義的風土にどのように組み込んでいくか、つまり “individualistic collectivism” をどう構築していくかが、将来の日本を成功に導く鍵であると結論付けている。また、もう一つの要因として、日本人の道徳観や社会行動に変化が起きていることを挙げている。具体的には、父親不在や援助交際などの家庭崩壊、いじめや不登校などの教育問題、少年犯罪などの社会の混乱は道徳観、倫理観の欠如にあるのではないかと推測している。

英語で書かれたこれらの伝統的日本文化に触れ、忘れつつある古き良き文化的価値観を思い起こしながら、New Japanに顕在化した様々な社会問題を冷静に再考する機会として欲しい。我々の文化や社会を見つめ直し、自分はどういう文化的価値観を今現在持っているのかをまずは再発見することが、これからの中の国際社会を生き抜く大切な第一歩になると確信する。

追記：何か本を読んでみようかなと思っている方に、恩師が編集長を務める『本のある時間』([www.timewithbooks.com](http://www.timewithbooks.com))をお薦めします。様々なジャンルの本との出会いを通して読書の楽しさを分かち合えるネット広場です。

#### 白鷗所蔵

Glimpses of Unfamiliar Japan 934/HE

Bushido: The Soul of Japan 156/NI

The Chrysanthemum and the Sword 361.5/BE

## ささやき

新年度です。まず図書館に来てみませんか？

「図書館の使い方は？」、「本の探し方は？」と思っている新入生、「レポートや卒論に必要な資料の探し方は？」、「データベースって何？」と思っている方、気軽に館員に声をかけてください。サポートいたします。そしてぜひ図書館を使いこなせるようになってください。

編	集	平成22年4月1日 発行
発	行	図書館だより編集委員会
〒323-8585		白鷗大学総合図書館
		栃木県小山市大行寺1117
		(0285)22-9737 (直通)
印	刷	<a href="http://web.hakuoh.ac.jp/lib/index.html">http://web.hakuoh.ac.jp/lib/index.html</a>
		株尚文堂印刷所